

動態再起論 Reboot Dynamics Theory



存在論的・認識論的転回

1. 分断によって静止した世界に漂う建築を、変化し続ける動的な世界の中に動態として再起動する

まず、世界を状態や構造として捉える静的な世界観から、動的で流動的な「はたらき（システム）」として捉える世界観へと移行し、人間と自然の関係性を再考することを目指す。

生命や存在を状態としての「点」ではなく、はたらきとしての「線」として理解し、それらの関係性を分断された要素のネットワークではなく、絶えず交差し変化し続けるメッシュワークとして捉える。

そして、建築を単体としてではなく、世界の中の相互作用する動態として位置づけることを目指す。建築は、変化し続ける世界の一部として存在することで新たな役割を担うことが可能となる。



遊び

4. 建築を他の要素と相互作用し全体を活性化させる動態として再起動する

世界の捉え方を変えようと思っても、それまでの生活や経験の中で染み付いた思考の構造は、そう簡単には書き換えられない。そのため、思考を転回させるには、生活や行為を少しずつ変えていき、その中で得た体験を通して、自らの思考方法を少しずつ「上書き」していく必要がある。そして、そのために必要なのが「遊び」という態度である。

遊びとは、単なる娯楽や余暇のことではなく、「よく分からないもの」を自分の手触りのあるものへと変えていき、再び「はたらき」を取り戻させる試みといえる。そして、それは単に個別の対象を動かすだけではなく、連鎖的に全体を動かし始める力を持っている。

このような遊びの視点を建築に適用することで、建築は自然や人間との相互作用を促進し、全体のシステムを動かし始めることができる。建築は、ただ存在するのではなく、環境や人々の営みに影響を与えながら新たな価値を生む動態として動き出す。

動態再起論は、現代社会が自然や環境、建築を「静的な構造」として扱う中で失われてきた「動態としてのはたらき」を再び呼び覚ますための思想である。この論は、資本主義的近代思想がもたらした分断的な世界観と、それが引き起こした環境問題を克服するために、自然と人間、建築と時間の関係性を再構築することを目指している。

建築を単なる機能や形態ではなく、環境や人間と相互に作用し続ける「生きた存在」として位置づけ、その可能性を追求する。



生命の循環からの学び

2. 生命を手本として、建築を自然の循環の中に組み込み、エントロピー増大に抗う動態として再起動する

メッシュワーク内の生命や自然現象といった要素は、それぞれが何らかの役割を果たしながら自然界の循環の一端を担っている。また、生命とは「エントロピーの増大に抗う存在」であり、自然界の循環の中にありながら、秩序を保ちつつ変化し続ける存在である。

そこにはある種の奇跡性と不思議さ、そして抗い続けることの美しさが宿っている。

建築もまた、「エントロピー増大に抗う存在」であるが、自然の循環と生命のあり方を手本とした動態となることで、自然循環の一部に組み込まれ、生命が持つ「抗い」の躍動感を宿すような存在となりうる。

そのようなあり方は、使命感や義務感からつくられるのではない、もっと根源的にそこに存在するすべてを肯定するような建築へとつながっていく。



ツールとスキル

5. 人間自体が主体的に世界と向き合う動態として再起動する

動態再起という考え方は、建築だけでなく、人間そのものの世界との関わり方に対しても転回を迫るものである。

特に現代の資本主義的思想をベースとした社会、特に都市部では、世界と関わるためのツールやスキルがサービスとして外部化され、人々は主体的に世界と関わる手段を失いつつあり、そのような社会では、環境に対する理解や感覚が深まることは難しい。

動態再起論が目指すのは、こうした状況を乗り越え、人間が世界と関わり合える「動態」として再起動することである。

この視点は、建築そのもののあり方にも影響を及ぼす。

ツールやスキルを持った人間が建築と関わることで、建築もまた動的な存在へと変容する可能性を秘めており、さらには人間と建築、さらには環境全体が相互に作用し、絶えず動き続ける関係性を構築する。



建築環境

3. 建築を「弱い力」に再び役割を与える動態として再起動する

断熱強化等の技術は重要であるが、そのままでは資本主義的近代思想を温存することになりかねない。

ここで必要なのは、電力のような独立した強い力で問題を解決しようとするのではなく、無償の自然エネルギーのような「弱い力」を見出し、それらを組み合わせ、引き出すことで問題解決を図ろうとする姿勢である。こうした弱い力は、それだけでは問題を解決するほどの力を持たないからこそ断熱（+気密化）と熱容量といった技術が重要な役割を果たし弱い力に役割を与える。

この弱い力は、地域性や変動性を持つため、積極的な関わりや創造的な工夫、そして、私たち自身の「弱い力」を見出し活用する感性や技術を求める。

また、さまざまなものに目を向け、心地よさのもとになるものをいくつも積み重ねていくことは快適性の質にも変容をもたらす。

建築は自然の弱い力を最大限に引き出し活用するような動態となることで「生きていること」と呼応するような存在となりうる。



風景の運動性

6. 建築を風景に運動性を与える動態として再起動する

資本主義的近代思想によって生み出された風景は、あらゆる側面で運動性を失い、その結果人々から現実感を喪失させている。

これに対し、建築を静止した構造物ではなく、環境と相互作用する動態として定義することで、建築によって生み出される風景に運動性を取り戻すことを目指す。

それによって動態として再起動された風景は、人々の感覚や行動、記憶に深く働きかけ、環境と調和しながら変化し続ける豊かな空間を生み出すことが可能となる。

それは、建築を単なる構造物の集合体としてではなく、都市や地域全体に活力を与えるシステムの一部として再定義する視点を提供する。